

京都教区時報

特集—京都教区ビジョン作り
小教区の頁—九条教会

第75号

発行所

京都市中京区河原町三条

カトリック京都司教区

広報室 (Tel 211-3768)

編集責任者 村上透磨

編集部 教理センター

田中司教認可

11月23日 京都教区創立記念日

教区的一致とビジョン実現に向けて

京都教区創立記念日は、京都教区の司教座聖堂が献堂された一九七二年11月23日を記念して、11月23日に行なわれます。古屋司教様が京都教区初代司教として叙階された一九五一年から二十一年後に、私たちは正式に京都教区司教座聖堂を持つことになりました。その喜びを年毎に新たにするのが京都教区創立記念日です。

今年の創立記念日は、特に京都教区ビジョンを実現するスタートにしようということになりました。これは司教評議会の決議を経て決められたものですが、今まで京都教区内の一人一人が力を出し合い作ってきたビジョンを、これから後、各地区、各グループでどのように実現していくのかを発表し合って、それを実現するための決意表明を各グループですることになりました。そして京都教区内の各地区の人々、各地区、各グループをお互いにより良く知り合うために、各地区、各グループがそれぞれ独自の趣向で自分たちの紹介をすることになっています。私たち京都教区のおおの一人ずつお互いに知り合うことはおろか、地区同志、グループ同志でも知り合うことが仲々できない状態の中で、ひと時でもそのような時間を持つことは非常に大切と思われまふ。この各地区、各グループの紹介では、自分たちの地区が、グループ活動が、解りやすく、しかも機知に富んだ面白いもの

が出てきてほしいものと思います。

京都教区ビジョン作りの過程については今までいろいろな機会に述べられてきましたが、少しまとめておきたいと思っています。

二年前(一九七九年)3月12日の邦人教区司教月例会の席で越知師が「教区ビジョン」を作ることを提案されたのがきっかけでした。それが教区時報4月号に発表されてから各方面で動きだしました。5月の司教評議会でもりあげられ、司教からのアピールを出した方がよいということで京都教区の全ての人々に向けて、教区ビジョン作りへの協力が司教から呼びかけられました。7月に司教評議会で司教アピールの検討とビジョン作りへの提案がありました。各地区でもそれに対する対応が討議されました。一九八〇年8月25日、ビジョン作り事務局発足第一回合宿、10月5日、ビジョン作り第一回合宿(情報交換)、9月11日、第一段階、12月1—1981年2月、第二段階、3月1—5月第三段階と進め、5月2日—4日、ビジョン作り第一回合宿へ(北白川)、5月16日—17日、ニコラス師と共に勉強会、6月13日—14日、ビジョン作り第二回合宿(河原町)、9月22日—23日、ビジョン作り最終合宿(北白川)、と経過しています。京都教区創立記念日に一致とビジョン実現への力を伸が与えてくださるようにお祈りください。(齋木嘉作)

教区短信



▽10月5日① 三重県司教集会(諸宗教について)

▽10月7日② 亀岡教会新築献堂式

▽10月16日③ 教区内男女管区長会議

▽10月19日④ 23日⑤ 邦人司教黙想会

▽10月26日⑥ 司教評定例会

▽10月27日⑦ 湯浅八郎氏追悼(国際宗教同志会)

▽10月28日⑧ マリアの宣教フランシス

▽11月4日⑨ 12日⑩ WCRPアジア大会(インド)

▽11月15日⑪ 田辺教会堅信

▽11月15日⑫ 22日⑬ 聖書週間

▽11月16日⑭ 邦人司教月例会

▽11月3日⑮ 20日⑯ 司教生涯養成コース(鎌倉)

▽11月22日⑰ 桂教会堅信

▽11月23日⑱ 山国教会25周年

▽11月23日⑲ 教区創立記念日(ビジョン発表、洛星高校)

▽11月29日⑳ 教区修女連の集い

司祭の一致とあるべき姿を求めて

京都教区司祭修道士研修会



独言。「今まだそんな事を言っているの」とお叱りの諸兄に、「そーなんです」でも司祭職って、実に奥深いものなんです。

よくよく御理解下さい。では報告を。まず成果から。(1)集まれた事。寝食を共にし、肌の付き合いが出来た事。(2)折り。中でも愛の一致である共同ミサ。(3)話し合い。心の交流。聞く事、心を聞く事。(4)真面目な面白い遊びと楽しい心で交わす杯(飲みニケーション)。(5)一致の中心である第一の奉仕者(司教)に心を向ける事等でありま。

(1)集まれ! 場所は多治見。神言会修道院。司教はじめ、東京よりラツキ師、修院より山口師参加。総勢38名。8月25日5時より28日正午まで。ウイチタのヨ

ゼフ会シスター3名。飯出しのため参加司祭といえ、霞だけでは生きておられず、今日の糧を与え給いし方々に感謝。

(2)折りました。当り前でしょう。でも心を合わせて捧げる共同ミサ、朝課、良いものです。弟子が二、三人集まる所、そこに教会があります。折りは凡ゆる働きの原動力です。折りの欠けた集いは、教会の集いではありません。折りが中心になる時、神様が中心になるでしょう。

(3)聞きました。話し合いました。まず、司教(一致の中心です)の三つの講話があり、二人の司祭、西野、ルーニー両師の司祭の歩みについての体験談に耳を傾け、それらをきっかけに我々のグループで話し合ったのでした。

(4)レクリエーション、飲みニケーションも大切にされました。歌う事も一致のためにかけがえのないものの様です。(5)最後の夜、各グループからの隠し芸が最後の夜を盛り立てました。中でもK師の一人二役の劇は抜群。誠に特別大賞をあげたい程でありました。

司教の講話の内容は大体次の様なものであります。先づ過去五回にわたる四旬節教書を思い起こしながら、司教の司教指針が示された。まず、みことば、秘跡特にミサ、相互愛を柱として、信仰共同体としての教会作りに励み、それを「福音宣教」の拠点としよう。然しそのため公会議の精神を見直し、更に福音、神の国、教会、キリスト、キリスト者とは何かと言った根本的なものの見直しをしなければならぬ。更に教会は開かれたもの、世界特にアジアに向って開き、その喜びと苦しみを自分のものになければならない。又信徒養成と自他共に福音化する努力が必要である。来日された教皇の様に、世界を見つめ、一人一人を大切に祈る姿を学び取ろう。他者の現状に目を向け、それを尊重し、祈りと行動をもって応えていこう。といったものだ。

教皇訪日は、日本人の多くの宗教的偏見を取除き、現実には信仰の自由をもたらし、更にマザーテレサ、ワレサ議長の来日も「良き時、恵みの時」を将来した。この様な好機は再び巡って来ないだろう。更に今こそ精神を重んずる宗教の出番が待たれる時である。我々は復活信仰を生命がけて伝える任務(と使命)を持つ。神の慈しみとゆるし、理解を超える救いの成就を体験しながら、この使命を二つの好機に伝えていく様頑張りよう。「私に結ばれている神において何事も出来る」という信仰に支えられて、といった主旨であった。

第二講話は教皇の平和メッセージ、第三講話は司祭修道者向けメッセージについての話であった。

西野師の話は、現在の働く人々のための仕事に至るまでの師の司祭としての魂の巡礼といったものが感慨深く話され、ルーニー師は、召命に至る両親の影響、特に折りの効果について、更に司祭の祈りと励ましによる兄弟的連帯に支えられ、自分が障害児問題とネオカクメナーレに、信徒と小さい人々に対する司祭の在り方についての一つの解決の光を見出すに至った事等を話された。そしてキリストの力が私の弱さを補うというパウロの確信の折りをもって終られた。

では紙面の許すかぎり、話し合いの内容をお伝えしたいと思う。

一、平和メッセージについて

1.日本は軍国主義への動きがあり、力のバランス論は誤りではないか。原則として教会は戦争放棄を訴えるべきだ。

2.平和の問題は抽象論に終ってはいならず平和について継続した教育が必要であり戦争美化への風潮に抗すべきである。

第二次大戦について教会はもっと研究し戦争の恐ろしさを訴えるべきだ。

3.正しい信仰と道徳を育てる様、教会は務めるべきだ。更に平和のための祈りとゆるしの心を真剣にもつべきである。

4.平和の条件として①人権を守る。②利己心(個人的、国家的)を克服すべきだ。

5.教会は社会の種々の問題について、もっと積極的にマスコミを通じて発言すべきではないか、等であった。

二、司祭向けメッセージについて

司祭の特有な役割とは一体何なのだろう。司祭同志の兄弟的一致の重要性と具体的方法とは何なのだろう。司祭である事と一人の人間である事との関わり。召命における両親の信仰、祈る姿、人間性の重要性。要理教育の改善と、信徒自身の養成の重大性と方法——等々であった。

「私達に休み所を」

ベトナム難民の方々と共に(草津教会)

八月の始めの暑い日曜日、ごミサが始まる前の御聖堂で四十名程が静かに祈っていました。この日、草津教会に招待されたベトナム難民の人々です。彼らは、県内蒲生郡日野町にある天理教会に仮住まいし、一日も早く新しい生活の始められるのを待っています。新しく来られた十数名の方々とふくめて、多くの人はアメリカやカナダに渡る許可がおりるのを待ち、ある人々は、日本語を習得し、日本

草津教会二重の喜び

草津教会創立25周年・甲賀教会創立祝別式

九月十三日(日)草津教会において、草津教会創立25周年記念式と甲賀教会創立祝別式が田中司教の司式で行なわれた。



に永住しようと考えています。

しかし日本では、外国人の就職を受入れる会社は少なく、彼らは狭い社会の中で生きていかななくてはなりません。いつもは日野町でミサにあづかっていますが、その日は草津の信者と共にごミサにあづかり、昼食はカレーライスを食べていただきました。彼らの歌うベトナムの歌は、和してこども、遠い故郷へ響かんばかりでした。ベトナム語、英語、日本語のとびかう中で、ことばが違っても、神様の子供である私たちは、共に楽しいひとときを過ごしました。

甲賀ニュータウンに新しく創立された甲賀教会(分教会)は、特にそれまで月一回の家庭ミサにしかあづかれなかった信者たちの大きな喜びとなっている。

子どもたちよ、私たちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行ないと真実をもって愛し合おうではないか(ヨハネ3章18節)のみ言葉は、彼らの信仰生活を深め神を知らない人々及び教会から離れた多くの兄弟を神のもとに導き、神を知り、家族と共にこの生活を送れることを約束している。

いろいろな話し合いや祈りのうちに創立された教会は、将来甲南、信楽、甲賀水口、甲西に各方面から移住される多数の兄弟たちのためにも重要な位置を示している。

アフリカ難民のために

大津教会バザー

大津教会では、七月十二日、それまで行なっていた東アフリカ難民のための募金にさらに金額を増そうとミニバザーを開いた。快晴にも恵まれ、有くの有志が作品作り、食堂の係など協力して下さりお聖堂も補助椅子を出さなくてははいけない程の人が集まった。バザーも盛況に終えることができた。その収益金九万五千円。募金、ダンボール廃取集分などを加えて十八万五千二百六十円をカリタス・ジャパンに送った。

みんなで歩こうウオカソン

みんなで楽しく歩いて、あらかじめ約束したスポンサーからお金をいただく募金活動、ウオカソンも今年で3回目。最初は世界の貧しい子どもたちに、去年はインド、ネパール、カンボジアの兄弟達のために300人近くの仲間が歩きました。

来る11月3日は、京都南部信徒協議会壮年部、婦人部、修道女連盟、子羊会、高校生会の協力を得て飢餓に苦しむアフリカの兄弟たちのために、なるべく多勢の仲間と歩くように計画をたてました。

●当日は河原町教会に10時集合

●コースは鴨川べり12km

●お弁当持参で

みんなでゆつくりおしゃべりも楽しみながら歩きませんか? 愛を示して下さいアフリカに!

(教区時報編集部)

あなたの良き隣人として

カトリック御葬儀・貨物一式(仏式可)

聖ヨゼフ葬典社

パウロ 杉下 安雄

京都市右京区西院寿町23
電話 (075) 312-7829製菓材料・舶来食品
和洋酒・修道院製クッキー
ミサ用ブドー酒

タキノ

〒604 京都市中京区錦小路通鳥丸東入
電話 (221) 0976-7タイプ・活版 } 各種印刷
オフセット }

今道印刷

〒602 京都市上京区天神筋一条下
ル下堅町152
電話 (075) 463-6024番

司教の足どり

七月〜九月



- 7月
- 16日 祇園祭青山見学。
 - 19日 ⑩小山教会ミサ
 - 20日 S教会婦人有志と面談。
 - 21日 Sセシリア辻沢お通夜出席。
 - 22日 シラルダ大司教(バンブローナ)一行来訪。
 - 22日 MM管区長田と面談。
 - 23日 信愛幼稚園職員ミサ。
 - 24日 教区内司祭修道士研修準備会
 - 24日 モンセニョール・コンデイスキ(パチカン郵便局長)来訪。
 - 25日 聖心のウルスラ会代表来訪。
 - 25日 宗教者青年会議代表M師(浄土宗)来訪。
 - 26日 ⑩田辺教会堅信ミサ
 - 27日 キーン、ウィッテ両師来訪。
 - 28日 善きサマリア人会代表来訪。
 - 28日 第12回全国カトリック保育者施設研修会(河原町)。
 - 29日 丁弁護士と面談。
 - 29日 保育大会ミサ司式。
 - 30日 S設計士と面談。
 - 30日 長岡京現地視察。長岡教会訪問
 - 31日 山国教会代表と面談。
 - 31日 桑名教会代表及びA師と面談。
- 8月
- 2日 ⑩河原町ミサ。老母と老司教の見舞(聖マルチン病院)
 - 3日 高松司教訪問。
 - 4日 S師欧州へ巡礼出発。
 - 9日 ⑩韓国殉教福者修道女会総長一行と面談。
 - 10日 京都教区大・小神学生集会
 - 12日 三重県高校生夏のキャンプ訪問
 - 13日 (唐崎メリノールハウス)
 - 13日 衣笠墓参。
 - 14日 滋賀県連合子ども研修会訪問。
 - 14日 (唐崎メリノールハウス)
 - 15日 聖母被昇天祭。河原町ミサ。
 - 16日 ⑩女子カルメル会ミサ。
 - 17日 邦人司祭月例会。司祭評常任委上京。
 - 18日 東京・東北
 - 19日 ⑩第6回青年宗教者会議(青森・松緑神道大和山)
 - 21日 森・松緑神道大和山)
 - 21日 青森・仙台
 - 22日 仙台司教訪問。帰洛。
 - 23日 ⑩河原町ミサ。地藏盆見学。
 - 25日 ⑩28日 教区内司祭修道士研修会。
 - 30日 ⑩河原町ミサ。聖ライムンド前祝い。修女連ほか来訪。
 - 31日 祝賀来訪客。信愛幼稚園ミサ。
 - 9月
 - 1日 ビジョン事務局会。
 - 1日 京都、高松教区神学生合同合宿(山国)
 - 2日 亀岡教会建築現場視察。
 - 4日 教理センター訪問。

- 5日 聖母女学院中高生代表来訪。
- 6日 ⑩河原町ミサ。結婚互助会。K教会代表と面談。
- 7日 司祭評定例会。
- 8日 教理センター理事会。
- 9日 京都・箱根
- 10日 ⑩12日 司教団各委員会秘書会議(箱根)
- 13日 ⑩草津教会25周年、堅信ミサ。甲賀分教会祝別式。ベトナムキャンプ(日野、天理教)訪問。
- 14日 NCC土居所長来訪。
- 15日 教区創立記念日行事準備会。
- 15日 国本師来訪。

お知らせ

ノートルダム女学院奨学金

創立者マザー・テレサ・ゲルハルディンガ奨学金

●応募資格

1. 京都教区のカトリック信者で、来年度ノートルダム女学院高校で学ぶ人
2. 経済的事情のある人。

●応募期限

11月20日

●問合せ先

〒606京都市左京区鹿ヶ谷桜谷町1
ノートルダム教育修道女会 本部
⑩〇七五・七六一・八四五五

信徒使徒職養成コース

第10回 祈り又は病者コース

- 日時 11月21日(土)・11月23日(月)
- 場所 北白川教会
- 申込先 京都カトリック教理センター

ロードショー

アウシュビッツ 愛の奇跡

コルベ神父の生涯

- 日時 11月11日(水)午後1時・9時
12月5日(土)午後1時・9時
- 場所 京都山一ホール(四条通り)
- ※入場券は各教会で購入して下さい。

主のみに



シスター・セシリア辻沢春子。聖母訪問会。去る7月19日 帰天。
一九〇四年宮津生まれ。
一九三一年初誓願

一九三七年11月6日生まれ。

宮津を中心に多年にわたり幼児教育に献身され、又所々の院長を歴任された。

京都教区一致の集い

創立記念日にあたって

京都教区では、教区創立記念日に、教区全体をあげて「一致の集い」を催す。教区内のお互いの地域を知り、教区の真の一致を実現するために、一人でも多くの信者がこの集いに参加するように希望している。(主催 京都教区)

月日 11月23日(月)(勤労感謝の日)

時間 正午・午後4時

場所 洛星高等学校・講堂

(京都市北区小松原南町33)

内容 各地区の紹介、ミサ(教区ビジョン発表)等

特集——教区ビジョン作り

六つのテーマ理解のために

教区ビジョン作りも大詰め。前号に特集された六つのテーマは、一つの系統立った関連を持つまでに話し合われてきた。ここではその関連と各テーマのポイントを、教区時報編集長村上透磨神父の執筆を基に、補足・解説を特集した。教区民一人一人の努力の結果である教区ビジョンの発表の前に、前号の特集と照らし合わせながら、より深いビジョンの理解に努力していただきたい。

社会とともに歩む教会

キリストは社会の中に働いておられる

御父によって定められ、御子キリスト

によって建てられ、聖霊によって導かれる教会は、「父と子と聖霊の一致に基づいて一つに集められた民」として、この京都教区にも、また各々の属する共同体の中にも、今も具体的に働いています。

私達は、教区として、また一人一人の信徒として、人々の中に神の国の建設のため遣わされている使命をキリストからいただいています。(マタイ28・27、マルコ16・15)

その神の国の建設は共通の目的と精神を持ちながら、種々の方法と手段・形などを通して表わされるでしょう。さて、私達京都教区民は、多くの祈りと聖霊の導きを求めながら意見の交換を重ねた結果、私達京都教区民として、一つのビジョン(方針と展望)を通じて神の国の表現のために努力する決意を致しました。それは、「社会とともに歩む教会」という事

であります。

それは、教会が社会に対し謙虚にひざをかがめ、さらに愛と正義に基づいて一人一人を大切にし、すべてのものを尊重する事を心に留めながら歩んで行こうとする心構えから生まれたものなのです。

三つの共通理解

この大目標に従っていくつかの方向を示す前に、いくつかの共通理解(同意)を得ておきたい事があります。

一、社会

私達がここで社会という時、今まで多くの人々が考えていた、聖(教会)、俗(社会)という区別(対立し、相反するものとして考える事)を賢明にさしひかえるという事でありま。社会とは、私達が生きている世界を指します。つまりそれは、聖と俗を兼ね備えた、私達の住む家庭・隣組・職場・地

域社会・国内・国外といったものであります。(現代世界憲章・社会の中の教会)さらに私達はその社会にあってキリストにならない、特に虐げられた人々、弱い立場にある人、小さい人々と呼ばれる人(マタイ25・31)に目を向けます。

二、社会と共に歩むという時

それは神とキリストとに今まで全く無関係であった世界にキリストと福音を伝えて行くという事より(それも大

中心課題は自己刷新と

社会との関わり

りをもとうとしているか

各団体から出されたビジョンの具体的なあり方についての意見を整理した結果、次の六つのテーマに分ける事が出来ました。

- (1) 青少年の育成
- (2) 教会の魅力と一致
- (3) 生活の中で祈りと典礼をどう位置づけるか
- (4) 教会の自己刷新
- (5) 社会に対して教会はどのような関わり

切ですが)むしろそういった社会の中に住み、働き給うキリストを見出して行く(使行7・28)という事です。従って福音宣教とは、キリストが社会の中に生き、働き給うことを人々に気付かせ、キリストと共に生き、働く喜びと仕合わせを見出せる事にあると考えます。

三、社会と共に歩むためには

- (1) 私達を取巻く社会がどういうものであるかを出来るだけ正確に把握する必要がある。(社会の客観的把握)
- (2) 社会が何を必要としているかを敏感に把握することが必要です。(社会の動き、流れ、良い点、欠けた点、要請などの把握)
- (3) 福音の精神をもって、それに応えていく事が必要です。(福音による正しい判断)

(6) 教会組織の近代化
さらにその中で中心となるものを検討した結果、(4)教会の自己刷新と(5)社会に対して教会はどのように関わりをもとうとしているかが中心となり、そこから他の四つのテーマが関連づけられる事に気付きました。

表にすると次のページの通りです。

日常生活を信仰の場に

中心課題

「社会とともに歩む」という大きな目標をもった今、二つの大きな中心課題を質問の形で提出したいと思います。

(1) 自己刷新が常になされているか。

(2) 社会に対して教会はどのような関わりを持とうとしていますか。

また、社会が自らを福音化するために

教会がもつ役割と方法は何なのでしょう。そして、そのために社会は教会に何を求め、教会はどのように貢献できるのでしょうか。

一、教会の自己刷新

自己刷新を考える時、まず前提として次のようなことが掲げられます。

- (1) 今までの自分達のあり方、語り方、生き方などに対する謙虚な反省と改心。
- (2) 新しい事、改善される事への明るい見通し。(それは活き活きと生きかえるように努力する事)
- (3) 福音の精神に従って、まず各々自分を作りかえ、行動する事。(福音化)

二、社会との関わり

この前提を踏まえて、前号特集テーマ4を参照してください。「社会の中で教会の自己刷新」が「教会の自己刷新」と「信徒自身の自己刷新」の大きな土台となっています。

自己刷新を基にしながら

具体的課題

教会が社会の中であって自己刷新をしながら活き活きとしたものとして人々の目をひき、心を捉え、引きよせられるため(証しとなるため)、また躍動して生き続けるためには、さらに次の四点を見直しておく必要があります。

- (1) 教会の魅力と一致
- (2) 生活の中で祈りと典礼をどう位置づけるか
- (3) 教会組織の近代化
- (4) 青少年の育成

一、教会の魅力と一致

社会が社会の中で本当の福音に従って自己を刷新していく時、自然に教会は魅力を持ったものとして現われてくるでしょう。また教会が、イエズス・キリスト

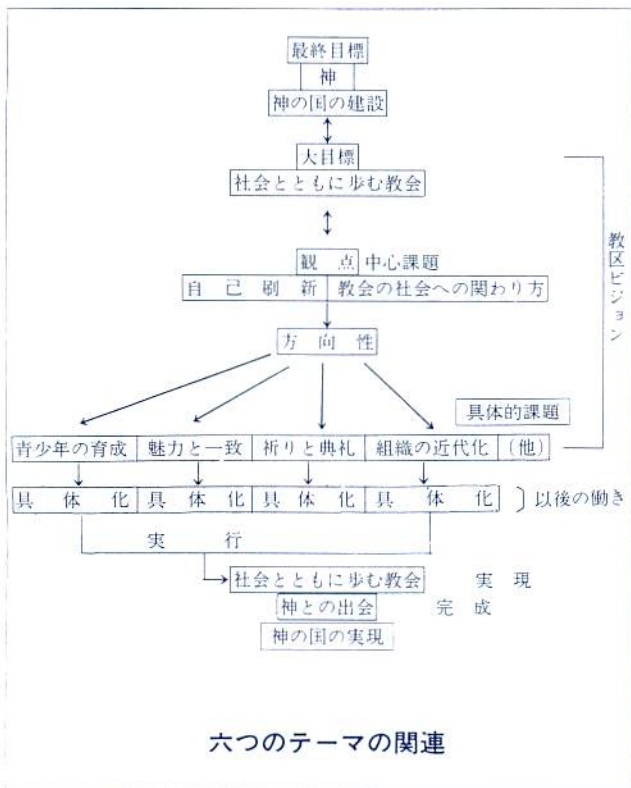
針は、共通理解として前提とした事にはほとんど含まれているのです。

しかしこの点は、中心課題の要点として最も重要な部分ですので、前号特集のテーマ5を再度読み返していただきたいと思っています。社会のそれぞれの場で働いておられるキリストを念頭におき、月曜日から土曜日までの日常生活に信仰を生きし、社会の状況に勇気をもって取り組んでいく姿勢を示して行きたいものです。さらにその社会の中で、弱い立場にある人々に私達の目が注がれるべきでしょう。

に対するあつい信仰に基づいた愛と正義による深い一致をもつ時、教会内に属する人も、喜び、平和、勇気、霊的な仕合わせに満ち、自分自身の信仰に対して魅力を見出すことになるのです。また教会に属さずともその一致を素直な眼差しで見ると人には大きな魅力となり、それによって教会に引きよせられる動機にもなるでしょう。

そして教会の魅力は、特に次のような点の中にも見出されます。

- (1) 真の対話の精神が生きており、それが見出され、その精神を通じて自分達が本当の心の触れ合いを信徒同志、信徒でない人々が感じさせられる時(その際、本当の対話の精神の意味がわかっており、実践される必要があります。この点については、前号特集テーマ



六つのテーマの関連

2の「対話とは何か」を参照してください。また、キリスト教的な意味で対話の精神が読み取られなければなりません。この点についてもテーマ2の方向性の部分で説明されています。

(2) 真の共同体を見出す事。(それは利害関係によって結ばれた共同体ではなく、愛と信仰、福音の精神などによって結ばれた共同体のことです。)

(3) 社会が成長していく上で、真に求めるもの(ニード)に応える事。(これは社会に迎合、妥協することではありません。)

形を重んずる権威主義、形式主義、フアリザイ的な否定主義、そして相互信頼と対話の不足などが教会の魅力を失わせているかもしれません。そして現代の人々は、人間が一人の人格としてではなく金銭や物としてしか扱われない世界、

(物象化) 自分の価値が十分に認められず、生きがいや存在の意義を感じられない世界(自己疎外)に生きています。

しかしそのような世界に対して、福音の光を照らしながら、これらの人々の苦しみを克服する力と救い出す勇気を教会が持つ時、教会は真に魅力あるものとなるでしょう。そのためにも、物質よりも精神の世界がすぐれている事、そして人間の生きがいがあるかを示し続ける愛と勇気が必要なのです。

幸いな事に、教会は魅力を示す有利な財産を持っています。それは福音による救いと教会を生かすことばです。世の中の種々の問題に真剣に取り組み、そこに、このことばを正しく、勇気をもって伝える事は、教会に大きな魅力と呼び起こす力となるのではないのでしょうか。

二、祈りと典礼

教会の自己刷新と、魅力と一致をもたらす源動力は、祈りと典礼を大切にする事にあると私達は考えます。しかしその具体的な方向を示す前に、いくつかの前提を確認しておきたいと思えます。

(1) 祈りも典礼も一つの神体験であり、その大切さを自覚する事。

(2) 祈りと典礼は実生活の中に生かされるべきであり、また生かされるはずである事を確認し、その意識と方法を考えるべきであろうという訴えに耳を傾ける事。

(3) 祈りと典礼は個人の自己成聖と完成のために必要であるが、それはまた、教会共同体作りの基礎であり、教会共同体は祈りと典礼によって集まる信徒の集いの中に実現している事。

(4) この祈りと典礼による教会共同体作りが、すでに新しい流れの中で始まっている事(典礼改革、種々の黙想方法、典礼を中心にした基礎共同体作りなどを認めた上で、この新しい流れに適應する方向が問われている事。その際、適應している人は、適應していない人を古いものとして軽んじ、取り残さないように配慮し、適應していない人は、

三、教会組織の近代化

教会が神からの恵みとみことばを伝えるという上からの流れを考えると、その組織のもつ特殊性は否めませんが、必要などところで形式化し、余りにも時代に立ち遅れた機構が教会に対する魅力を失わせている事も事実のようです。教会組織の重要性とその価値を十分認めながらも、正当な意味の民主主義的要素は教会組織の中に取り入れられるべきではないでしょうか。(これは教会憲章第四章、信徒使徒職教令などに、よく現われているところです。)

教区としても、一般的な組織の在り方を謙虚に学んで、現代に合った組織作りを目ざすべきでしょう。そしてこれこそ、

その危機感や改訂の痛みを感じながらも、それに応じて行く勇気を持ちましよう。()

(5) 時のしるしの中に神のみ旨を見出し、現在に真の意味の適應をしていく知恵を持つこと。(それが現代に信仰を生かす事になるからです。)

以上の前提を確認しておけば、祈りと典礼の「新しい流れに適應するため」の方向と課題を取り上げやすくなるでしょう。前号特集テーマ3に掲げられている三つの方向と課題は、すでに始まっている新しい流れに、正しく適應するための努力項目なのです。

社会の中で有効な関わりを持つて行こうとする教会にとって、是非必要な事なのです。

組織の近代化は種々の点から考慮されなければなりません。ここでは「司祭と信徒の役割」という内容に限って話し合われました。前号特集テーマ6には、いくつかの具体的な課題が掲げられています。

四、青少年の育成

青少年は教会の刷新と発展の喜ばしい希望です。教会の明日は、とりもなおさず彼らの掌(手中)にあるからです。そのために私達はあらゆる努力を惜しみません。

自己刷新という観点から青少年の問題を見る時に、次の二点に注目すべきでしょう。

(1) 教会、青少年自身が自己の刷新に目覚め、努力するように促し、その努力を助ける。

(2) 青少年に対して、ふさわしい理解、態度がとれるように、教会が自己刷新していく。

さて、この未来の希望である青少年の問題について、私達は前号特集テーマ1のような方向づけをしました。青少年は力と希望と夢とに溢れています。その原動力を、人格的な自由と自立に向かう成長に傾けた時、教会の刷新の重要な核となることでしょう。教会の未来はまさに青少年にかかっているのです。

ビジョンの実現に向けて

聖霊の導きのもとに

以上が「社会とともに歩む教会」というビジョンに基づいた方向性のまとめであります。

確かに、社会とともに歩む教会建設のためのあらゆる方針や方向性をここに網羅し尽くしているわけではありません。また、この方針を基に、具体的な方法をその都度考え、実践していくことが今後の課題である事は言うまでもありません。

社会の中に勇気をもって

「社会と共に歩む教会」という時、教会は社会と対立したり、社会を汚らわしい罪と悪に満ちた世界とだけ考えず、むしろ社会の中に教会があることを認識し、社会の中に住み、働き給うキリストを見出しながら、社会を福音によって変えるという事であれば、外から福音化するのではなく、社会の中にあつて内から聖化し、浄化し、福音化していくものであるべきだと思います。社会の中にある良いものを指摘し、それを伸ばし、発展させる事、悪いものがあれば、それを指摘する勇氣を持ち、浄化し、正しい方向を指し示し、正義と愛に満ちた仕合わせな社会を築くよう助ける事を使命とするのです。もちろんそれは、教会の教会らしさ、教会の本来の姿（アイデンティティ）を決して失うものではなく、迎合や妥協でもない、かえって社会の中にあつて社会

とともに歩みながら、社会の「良い塩・光」となつて歩む事を目指しています。

世の光となるために

従つて社会は、大きく分けて二つの事に注目すべきでしょう。

一、自分自身が何であるか。つまり教会とは何であるか。（アイデンティティ）そしてその本来あるべき姿に従つて、自分を新しく作り変え、現在の社会の中で生き活きと生き続ける場を持つという事です。（教会の自己刷新）

つまりこれは、福音が今の場で生きているという事なのです。

二、次に社会の現状（時のしるし）と要請が何であるかを知り、またそれが正しい方向に進んでいるかを見極める事です。何が良くて、何が欠けているかを指摘し、よりよい社会への歩みのために道を示し、導き手となり、歩みへの希望に満ちた力（道・真理・生命）となるように助け励まされなばなりません。（世の光、地の塩）

しかし、くどいようですが、「キリストは社会の中にすでに働いておられる」という事であり、それは教会の社会に対する謙虚な、愛に満ちた尊敬となつて現われて来るでしょう。（社会にひびきがかめる）

と社会との関わりを大前提とした取り組みが始められることでしょう。

自己刷新の観点

自己刷新は次の三つの観点から進められるべきであると考えました。

- (1) 社会における教会自身の自己刷新
- (2) 社会と教会における信徒の自己刷新
- (3) 教会が社会と関わりを持つ際の自己刷新

その際、教会と信徒は社会に対して開かれており、社会の中にあつて、社会とともに歩むものである事、教会は自分が信仰によって生きている毎日の生活の場に現われるべきである事、さらに社会の中で弱い立場にある人々に、特に私達が目が見られるべきであると考えました。

具体化への努力

そして社会とともに歩むために、社会との関わりを正しながら自己刷新していく態度から、次のような具体的な面に注目して行くということでした。

- (1) 教会の魅力と一致
- (2) 生活の中で祈りと典礼をどう位置づけるか
- (3) 教会組織の近代化
- (4) 青少年の育成

（ただし、この順番は重要性の順位ではありません。）

確かに、自己刷新しながら社会の中にあつて、社会とともに歩むためには、これだけで十分ではないでしょう。補わねばならない事も数多くあります。さらに、

これを具体化する課題が、これからの私達に残されています。

しかしさしあたって私達は、これらの具体的な方向づけに注目しながら、より具体的な方法を使って神の国の建設に向かって行きたいと思います。

神の望みのままに

私達には、私達の持つ誠意と熱意の外に、大きな希望と支えがあります。それはすべての恵みと啓示の源である神、そのいつくしみと心を余すところなく伝えられる主イエズス・キリストとその福音、さらにすべての人々を誤りなく導き、助け、励まし給う聖霊の導きです。

私達がこの神の御前に平伏し、世界に謙虚にひびきがかめるならば、そこにすばらしい光が私達の行く手を指し示してくれるでしょう。

この世界を創り、御子を住まわせ、御子によって聖化し、聖霊によって完成させようとなさるこの世界に私達は皆、それぞれの方によって遣わされています。

神の望みのままに、神の望みの通り、神の望みに従つてこの世界を刷新し、聖化する大きな務めが私たちに与えられているのです。社会の中にすでに働き給う主に従つて、社会に平和と仕合わせを伝える使命が与えられているのです。

願わくは、主イエズス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが私達を祝し、私達の行く手を明るいものとしてくださいますように。

アレルヤ唱(歌)

こうして二つの朗読を通して、旧約と新約の時代にわたって働きつづけるキリストの姿が想い起こされた後、いよいよクライマックスのうちに、キリスト御自身の言行が記された福音書が読まれますが、アレルヤ唱はその福音を迎える歌です。古代の典礼の面影を伝えている東方典礼では、ここで助祭に奉持され、ローソクを持った侍者にとまなわれた福音書の本が、行列をつくる荘厳に入室して来ます。それを会衆は全員起立して、喜びの歌「アレルヤ」で迎えるのです。初代中世の教会を通して、福音書の本そのものはイエス・キリストの象徴として非常に大切にされ、尊敬をはらわれて来ました。現在多くの教会では「聖書と典礼」のペラペラの二枚の紙が朗読に使われていますが、そのために、福音書をキリストのシンボルとして大切にすることが失われていくようで、残念な気がしま

目

信仰はじまることから

——みことばの祭儀の構造(下)——

まつもと さぶろう

す。福音書、聖書の本そのものをも大切に扱う気持ちを失いたくないものです。アレルヤの言葉の意味は「ヤーフエをたたえよ」という意味ですが、神を賛美する喜びの歌として旧約時代から典礼の中でよく使われていました。詩編一四六・一五〇番はアレルヤの詩編といわれ、詩編のはじめと終わりにアレルヤの言葉が歌われます。

福音・喜びの訪れを歓迎し、イエス・キリストご自身の言行が読まれるにさして、大きな喜びをもってアレルヤを歌います。アレルヤの言葉に合わせ、福音のみことばを要約した一節をとえ、福音を聞く心の準備をします。

聖福音——第三朗読

イエス・キリストご自身の言行が朗読されるにあたって、全員起立して迎えます。中世まで「ひざまずく」習慣はなかったため、起立は尊敬と緊張を表わすもつとも典型的な姿勢でした。福音書はキリストを表わすので、司祭が助祭がいるならばそれを朗読します。朗読に先立って「主はみなさんとともに」と呼びかけ、今この集会でイエス・キリストが語ろうとしておられることを想い起こします。また時には香をたいて尊敬を表わし、ローソクをたきさえた侍者が、世の光であるキリストの現存を象徴します。今、一人一人に向かつて、教会の中に生きつづけるキリストが語りかけるのです。みことばの祭儀のクライマックスです。私たちは、キリストの呼びかけ「福音

に目を傾けます。

説教

朗読につづいて、神のみことばの公の宣言者、解説者である司祭(またはその代理人)が説教をします。説教は神のみことばを現実の私たちの状況に橋渡しをするもので、みことばの一部分ともいえる重要な所です。みことばに基づいて、キリストの秘義とキリスト教生活の原則を説明するのです。典礼憲章は、信徒の集まるミサで、重大な理由なしに説教を省いてはならないと教えています。

信仰宣言

日曜日と祭日のミサでは、説教につづいて信仰宣言が唱えられます。いわば、今語りかけられた神のみことばに「信じます」と答える、信仰と従順の祈りであり、公に自分の信仰を告白、宣言する祈りです。洗礼式のとぎにもこれが宣言されることを憶えておられるでしょう。

内容は父と子と聖霊なる神への信仰を要約したもので、初代教会から受けつがれて来た祈りです。共同の礼拝の土台である信仰の一致がここで表わされ、確認されます。

共同祈願

みことばの祭儀の構造のところでお話したように、神のみことばを聞くことは、私たちの答えの祈りをうながします。答えにはいろいろな祈りがあるでしょうが、初代から教会がとりわけ重要な教会

の姿勢として大切にして来たのが、「とりなしの祈り」です。つまり人々のため、人々に代わって祈る司祭の祈りです。全世界の人々のため、為政者のため、テロテロ1・1・2、教会のため、祈りを必要としている人々のため、人々に代わって祈り、ご自身をささげものとする大司祭キリストの祈りに加わる祈りです。大変古い伝統に基づいた祈りですが、その典型は聖金曜日(の典礼の中で、教会のため、教皇のため、ユダヤ人のため、困難に直面する人々のため等々の公式祈願に残されています。こうして、みことばの祭儀の結びが、大司祭キリストの祈りに結ばれて、全世界の人々へのとりなしの祈り(代禱の祈り)となることによつて、ミサの後半、感謝の祭儀につながって行きます。なぜなら、感謝の祭儀・食卓の典礼は、すべての人々救いのために自らをささげたキリストの死と復活、キリストの司祭的奉獻の現在化だからです。

このように、みことばの祭儀と食卓の祭儀は、互いに互いを説明し、補足し合い、一体となつてキリストのからだである教会の礼拝をつくり上げているのです。

みことばは信仰の土台であり、特に典礼の中で読まれるみことばは秘跡とともに教会生活の中心ですから、できるだけみことばのメッセージが人々の心に響くように大切にしたいものです。朗読する人もそれだけの準備と訓練が必要でしょう。また朗読の後には少し沈黙の時間をとつて、みことばを味わいましょう。

洗礼を受けてわずか三年後に神学校に入り、八年間の養成後、司祭叙階のお恵みを受けて二十二年余になります。福音宣教の最前線ともいふべき小教区に奉仕するために任命された最初の任地が九条教会でした。それから、河原町、西陣、河原町を経てふり出しの九条に戻ってはや八年になります。神の恵みとともにあったこの間、いかにそれに応えてきたかを問う日々をおくっております。

叙階後三年目に、第二バチカン公會議が開かれました。その諸文書、公會議後の世界代表司教会議(シノド2)の「世界の正義」「福音宣教」「教理教育」「キリスト者の家庭」の諸勧告、また、「エク



司祭生活を 通して

レジウム、スアシー御自分の教会を「諸国民の発展と調和」というパウロ六世の回章、そしてヨハネ・パウロ二世の「レテンブートル・ホミニス」人間の贖罪主、「いつくしみ深い神」という回勅、今回の来日に際しての諸メッセージなどに目を通しました。こうして、二十年前と較べて、変えることのできるものについて変える勇気を、変えることのできないものについて受けいれる冷静さを、変化するものと、不変なものを識別する知恵を祈り求め、また行動すること、司祭生活を通して、人々につたえたかを見直す日々が当分続きそうです。

藤堂隆神父(九条教会主任)

30年程前九条教会が出来る迄は吉祥院の信者のお宅に西院教会から時々タワイ神父様が主目的の御ミサを献げに来て居られました。当時の古屋司教様から九条に教会を建てたいと思うので土地を探すようにと指示を受け「相互タクシ」所有地」と標識のある土地を

九条教会



小教区の頁

あります。また神父様は公教要理の指導はシスターや伝導師信徒に一任し御自分からは自ら祈りに専念されていつ教会に来て御聖堂の中にひさまづいて祈っておられる姿を見受けました。

又古屋司教様も毎月一回(各回50名くらい)一年間宣教活動に御協力を賜りまして「家族ぐるみ」で洗礼を受ける人たちが増していく中で、神学校や修道院に行く人たちも約10名程に及びました。

家庭集会の経過報告をした時「人が救われるのは言葉ではありません。祈りです」と叱られたことがありました。又郊外の桂川堤を散歩しておられる時もそれは、祈りの時であったように見受けました。タワイ神父様任中の10年間の受洗者は五〇〇名に及びそして67歳のタワイ神父様は未だ一度もキリスト教が伝えられていない土地への転任を希望しておられました。

二代目の主任司祭として昭和43年1月ゴールマン神父様を迎えて九条教会は5年間神父様の御指導を頂きました。ゴールマン神父様は古いカトリック教会の姿を公會議以後の現在に適した新しい教会に変えていきたいという強い熱意に燃え

ておられ、SVPの集りでは約一年間、「現代世界憲章」の内容と世界各地の教会の現状を説明して下さいました。そして司祭は今教会にじっとしている時ではない、自分も労働司祭として中央市場で働きたいが司教の許可が出ないのだと言っていました。特に信仰の体験談を喜ばれ信仰は先づ体験からという事を強調されて五年間の御指導を頂きました。

次に三代目の主任司祭として昭和47年1月ウォルシュ師を迎えました。神父様は「南区住民の為の九条教会」と言う事を深く自覚され御自分で人生と宗教に関するパンフレットを印刷されて信者に配布し、また二万通の手紙を南区住民に配る事を実行されました。ミサが終わると聖堂の入口に立つて信者一人一人に笑顔で声をかけすべての日本人に常に仕えていこうとなさる謙虚な姿にはいつも頭の下がる思いでした。

次に四代目の主任司祭として昭和48年8月、初の日本人司祭とし、藤堂神父様を迎えました。以前と異なり、社会事情が複雑に変化しており、各教会共に布教活動が極めて困難な時代に直面していると考えられます。しかしゴールスカウト指導者の中から召命を受け修道女となった人もあり福音宣教を読む会をはじめ聖書研究会、家庭集会、中高生の新聞を読む会、京都教区のビジョン作り指導等に奔走しておられます。なお教会の敷地内には「働く人の家」があり西野神父様が若い人たちの指導に当たっておられます。

(田中範雄)



ビジョンについて一言

ビジョンと言う言葉の説明を何度か聞きながら、今だにわかったような、わからないような気持ちのままでいる私ですが、教会でのビジョン作りはいよいよ大詰めを迎えたようです。

勉強不足でビジョンの意味をよく理解していないのか、食はずぎらいなのか、

「始めて眼鏡をかけた時、物がはつきり見えてどんなに嬉しかったことか。樹の葉っぱが一枚一枚見えたのに感激したわよ」と聖書の分ちあいの後で、あるシスターは話して下さった。

私も二年前眼鏡を

買った。始めて眼鏡をかけた日の喜び、私の場合は地下鉄の向こう側の人々が

はつきり見えたこと。それまでいつも向こう側に知人が電車を待っているように思えてならなかった。だから眼鏡をかけ、向こう側の人が見えたことは大きな喜びだった。

そんな感動をいくつか覚えていた。就

ビジョン、ビジョンと大上段に振りかざされると、昔の教えを受けた私には何か古いものは時代遅れ、役立たずと言われている様であまりいい感じがしないのが本音です。ある程度時代と共に変化してゆくものはあるでしょうが、すべて新しいものだけがよいと言う事はなく、古いものの中にもよいものは、たくさんあると思います。聖歌にしても現在のものは古くさいと言われると返ってラテン語の聖歌に郷愁を覚えるのは私だけではないと思います。先日ある修道院で死者ミサに参りました(その時は日本語ですが)末信者の青年はラテン語の方がいいな、迫力があって何か感動を覚えると言いました。福音を伝える事にも私達なりに、やぶさかではなかったと思います。一人一人

が自己成聖にはげみ信仰に生きる時、言葉に出さなくても周囲の人を信仰に導く事が出来ると思うのです。それでは遅すぎる。一生かかって一人も救えないかも知れないから、と言われてもそれぞれ個人の性格もあり、又それしか出来ない人もあり、方法は違っても、その努力が私には一番大切な事だと思えるのです。同じビテームでも活字を通して見る時と耳からはいる時と違った印象を受ける時があります。ビジョンもそういった意味で正確にそのものを把握していない事があるかも知れません。

ともあれ、私達はゆっくりゆっくり、かついて行けません。あまり先走りされるとますますわからなくなります。決して古いものだけがいいとは思っていません。

嬉しくて泣いてしまっていた。以後いろんな場で按手されている光景に出会うと、私も一語に祈りいつの間にかジーンとしてくることが多い。

自然も又いろんな感動で目の前に現れる。春の信州で見た高いこぶしの木、子供の頃そのこぶしの花の下で遊

びまわっていた。でもふるさと北海道へその花の咲く頃帰省することはなかった。だからまさか信州でそんないろいろな思い出のある木と出会えるとは思っていなかっただけにその喜びは大きかった。

いろいろな物事に対する感動、不正に対する怒り、あわれみの心などなどいつも忘れることのないように。

(K)

ん。私達もこれ迄世間の人達のいい処を見ならう様に心がけて来たつもりです。けれども世間の風潮に迎合しているのではないかと言うような印象だけは私達に与えないで下さい。教会は親しみやすい場であると共に神聖な場でもあると思います。教会でのマナー(特に聖堂)神父様に対する礼儀などやはりこう言った作法は残しておくべきだと思います。むづかしい事はわかりませんが、的はずれかも知れませんが感じたままを書きました。(N生)



▲社会とともに歩むと云うのでしたら、社会の人々にも解ってもらえる言葉で書かれては如何でしょう。文章として信者の私達にもちよつとむずかしすぎます。

▲教会は社会とともに歩まねばならないとともに歩んではならない事もあるのでありませんか。

▲青少年の育成の項。青少年の立場が受身すぎる様に思えるのですが。

▲亀の様に歩む人と、兎の様に速く前を走る人と互いに理解し合わねば。

▲大変な仕事、努力のあとが何えです。でもこれが大変、具体化、実行、これが私達に残された課題ですね。

(以上各の意見の一端、足をひっぱるつもりは首頭ありません。)

地下鉄の向こう側

感謝していたように思う。

そして初めての黙想会。私は受洗前、黙想会が何だかわからず、来てしまったという不安があったにもかかわらず、大きなお恵みの中にいた。こみサの時、神父様から按手して祈っていただき、ただ

小さき者よ

国際障害者年に思う(5)

施設紹介—聖母の家

が、昭和五十五年四月より、新しく認可された社会福祉法人三重聖母の騎士会がかわって現在に至った。

第三代園長

ロバート・R

・ザン神父

(カトリック

メリノール宣

教会)は、優

れた経営力と

旺盛なる熱意

により、経営

を刷新し堅実

なる基礎を築

いた。昭和五



聖母の家は、精

神薄弱児の収容施

設で、四日市市沈

木町三九八の一に

あり、現在児童一

二四名が、職員六

十余名の介護指導

を受けている。創

立は、今から十五

年前でカトリック

四日市浜田教会の

神父と信者が、原

動力となつて建設

された。

施設の設置経営

の主体は、社会福

祉法人カトリック

京都司教区カリタ

ス会が当つてきた

が、昭和五十五年四月より、新しく認可

された社会福祉法人三重聖母の騎士会が

かわつて現在に至つた。



十五年六月より、シスター・アンナ浦田

喜代子(汚れなき聖母の騎士聖フランシ

スコ修道女会)が、第四代園長となり、

作業訓練の充実、厚生施設への転換等の

問題にとりくみ、一層の充実と発展を期

して、日夜努力している。

また、昭和四十六年四月一日より、施

設内に養護学校を設置し、学会児童の義

務教育を行っている。校長は、第三代園

長のロバート・R・ザン神父である。

詩二題

ここにお二人の詩を紹介します。

お二人とも障害をになつて、雄々しく生

きていられる方です。

にんげん (柏木正行)

にんげん

けつして おきものでもなく

ただのかざりものでもない

生きた にんげん。

目が みえなくても

ものが いえなくても

背骨が まがつていても

じぶんで ごはんが 食べられなくても

おしりの 始末が できなくても

やっぱりにんげんでしかない

にんげん

にんげんだから かんじるのです。

にんげんだから たのしいのです。

にんげんだから わらうのです。

かなしいのも にんげんだから あやう

く なみだを おとしそうになるんです。

なにもかも にんげん だからです。

(「むくの木」の詩より)

目と耳 (水野源三)

脳性麻痺のために

すべてを奪われたが

神様が 目と耳だけを

守ってくださいました。

みことばを読むために

みことばを聞くために

みことばによつて救うために

(「主にまかせよ 汝が身をより」)

詩はうたう人の心を吐露するものなら

その美しい言葉だけの詩を選ぶのは詩人

に失礼にあたるかも知れません。

ですから、この方々の詩集を読んでそ

れを祈つて下さい。(編集部より)



時報が対話 おう「書く
手段なら 者も読む者
ば「互いにも、投稿者
心を開けあ も編集者も

◆上を向いて歩こう。光を失わぬ様に。

下を向いて歩こう。野に咲く可憐な花を

見落さない様に。黄色いひな菊は陽に似

たものとなる。太陽を見つめ続けたので

私達の目揺し。それは神へ。(MT)

◆実は私は大学生。編集の片やら学業に

しばらくご無沙汰していたキャンパスに

涼しい風と見知らぬ学生の顔が流れてい

く。時の流れははやいもの。友人はもう

卒業。とり残された私の心には、希望と

不安の……。(J)

◆預言者のな科学者湯川博士の死を悼み

ながら、教区が取組んでいるビジョン作

りの重みをしきみと感じる。科学者も

キリスト者もビジョンはキリスト。(Y)

◆かつての詩のグループから「メルヘン

と人形展」のお誘いが届きました。心の

中のメルヘンを忘れつつある自分を、そ

れは思い出させてくれたみたい。(K)

◆ウオカソンも三回目。文化の日の行事

として、定着してきたのでは。毎年、巡

回車でまわっていたけれど、今年は鴨の

河原、初めて歩けそう。果して、完歩

できるか。(亜)

◆……。(き)

本紙を福音宣教に役立たせるため、
ご近所、お友だちにもお見せ下さい。